

北ジャカルタ市内周辺部における住民自治組織

—北ジャカルタ市クラパガディン郡東クラパガディン町内のカンボン・プロガドゥンを中心に—

黒 柳 晴 夫

1. はじめに

一般に都市近郊農村では、開発政策による産業化や都市化の進展によって工業用地、商業用地、さらに住宅用地の需要が都市周辺部へと拡大していくために、農地の改廃が進む。その結果、農民の生業である農業の継続が困難になるために、農民は、農業では生活を支えられなくなり、雇用労働者、給与所得者、あるいは自営業者などのいわゆる都市的生活者にかかわらざるを得なくなっていく。また、産業化の進展は都市部に大量の労働力需要を生み出し、農村から都市への人口移動をもたらすことになり、住宅不足や住宅地不足から都市周辺部の住宅地化も進み、かつての農民と、都市内部からの転居者や都市外部からのニューカマーとの混住化が進む。その結果、従来の農村社会の統合を支えてきたさまざまな社会集団や相互扶助組織の累積構造が崩れ、かつての農村社会だった都市周辺部が都市社会へと変容していくことになる。

本報告で取り上げるインドネシアの首都ジャカルタも例外ではない。かつての農村部でこのような都市化が進むと、農地を失った農民や農村部で生活の糧を得ていた土地無し農民は、農業以外の仕事に雇用の機会を求めることになる。なかには農地や屋敷地の売却代金で近辺の農村部に新たに農地を求めて転出し、そこで農業を継続する農民

がいることも確かに皆無ではない。しかし、多くの場合、ライフコースの途中で転職をせざるを得なくなった彼らにとって、都市産業に従事できる技能や知識の集積が乏しいために、安定した雇用の機会を得ることは決して容易ではない。したがって、彼らの多くが就業できる仕事は、例えばガードマン、清掃、建築作業、駐車場警備、小売り等の単純労働やインフォーマルセクターと呼ばれてきた都市雑業部門などに集中することになる。

また、かつての農村集落の再開発が行われなかったり、立ち退きを望まず集落の再開発を拒んだまま都市に組み入れられたりしてきたところでは、屋敷地と家屋の所有がそのまま継続されている。そのため、これらの所有者には、就業の機会を求めて市内に流入してくるニューカマーへの部屋貸しが、むしろ安定した収入源になっている¹⁾。このような旧農村集落がそのまま温存されているカンボン (Kampung)²⁾ では、ニューカマーの流入による人口増加と、住宅や居住関連のインフラ (道路、電気、水道、下水、排水路など) の整備の遅れによって、居住環境が劣るところが少なくない。

しかし、上述したようなカンボンでは、かつての農民とその親族である地元出身者と、出身と居住の経緯を異にするカンボン内や市内からの転居者、および市外からの転入者、いわゆるニューカマーとの混住化が進むことになる。なぜなら、これらの転居者や転入者のほとんどが低所得階層に属し、都心部に比べて住居費と生活費の安い都市

周辺部のカンボンに集まるからである。加えて、都市の周辺部に工業団地や郊外型の商業施設が進出するようになり、これにともなって都市周辺部のカンボンから通える範囲に雇用の機会が増加してきたことによる。

そこで、混住化の進展によって、地元住民は、居住空間を同一にする転入者や転居者を住民としてどのように受け入れているのか、また受け入れるにあたって既存の住民自治組織をどのように再編してきたのか、その実態を知るための手掛かりとして、2011年12月10日～11日と2012年8月21日～23日に北ジャカルタ市クラバガディン郡にある東クラバガディン町内のカンボン・プロガドゥンとプガングサアンドゥア町内のカンボン・ワルンジェンコルで実施した住民の聴取調査結果の一部を報告する。

2. 調査地の概況

インドネシアの首都、ジャカルタ首都特別州（Propinsi Daerah Khusus Ibukota Jakarta）を構成する5市の一つ北ジャカルタ市（Kota Administrasi Jakarta Utara）は、1619年に設立されたオランダ東インド会社の植民地都市バタヴィア（前身はスダクラバ）が建設されたところである。北ジャカルタ市は、図1に示すようにジャカルタ首都特別州の北側にジャワ海に面して位置し、行政的に6郡（Kecamatan）に分けられている。

ここに事例として報告するのは、その6郡の中で唯一ジャワ海に面していないクラバガディン郡（Kecamatan Kelapa Gading）にある3町（図2参照）のうちの東クラバガディン町（Kelurahan Kelapa

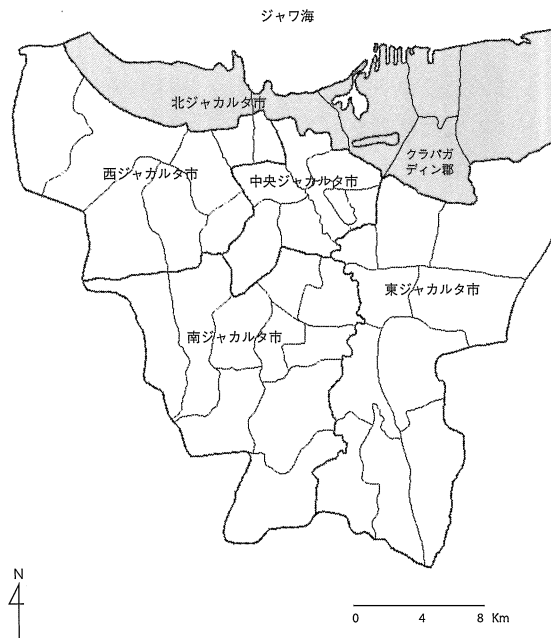


図1 ジャカルタ首都特別州北ジャカルタ市
（資料）北ジャカルタ市役所資料より作成



図2 北ジャカルタ市クラバガディン郡と3町
(資料) クラバガディン郡役所資料より作成

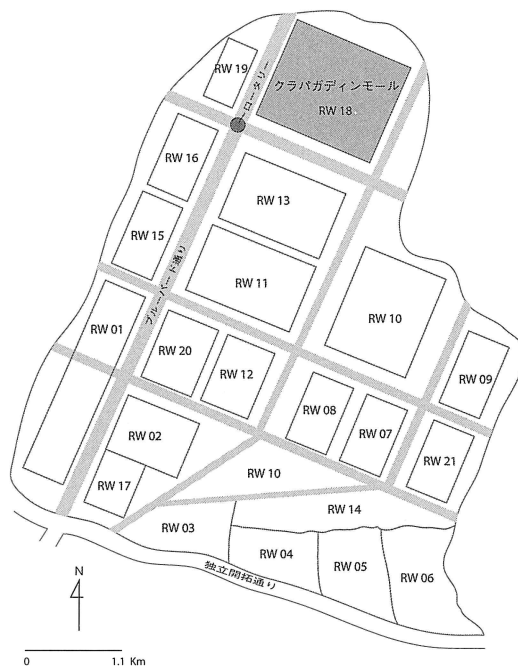


図3 東クラバガディン町と大組 (RW) の構成
(資料) 東クラバガディン役場資料より作成

表1 北ジャカルタ市クラバガディン郡内3町の面積・世帯・人口・人口密度・大組RW数・隣組RT数
(2000年・2005年・2010年)

町	年	面積 (Km ²)	世帯 (戸)	男性 (人)	女性 (人)	合計人口 (人)	人口密度 (人/Km ²)	性比 (男/女)	RW数	RT数
西クラバガディン	2000	6.50	6,909	12,384	11,732	24,116	3,710	106	13	145
	2005	6.50	8,024	13,706	13,138	26,844	4,129	104	15	149
	2010	4.53	10,154	17,291	15,243	32,534	7,182	113	21	208
東クラバガディン	2000	3.55	10,234	20,787	20,326	41,113	11,581	102	20	228
	2005	3.55	11,010	21,149	20,691	41,840	11,786	102	21	239
	2010	5.31	10,224	19,912	18,361	38,273	7,208	108	21	241
プガングサアン ドゥア	2000	6.28	12,970	17,568	17,658	35,226	5,609	99	21	196
	2005	6.28	13,591	18,507	18,508	37,015	5,894	100	21	200
	2010	6.28	13,615	24,132	20,260	44,392	7,069	119	25	249
クラバガディン郡 合計	2000	16.33	31,113	50,739	49,716	100,455	6,152	102	54	569
	2005	16.33	32,625	53,362	52,337	105,699	6,469	102	57	588
	2010	16.12	33,993	61,335	53,864	115,199	7,146	114	67	698
北ジャカルタ市 合計	2010	146.66	397,322	777,771	645,840	1,423,611	9,707	120	431	5,027

(資料) Kelapa Gading Dalam Angka 2000, 2005, 2011

Gading Timur) とプガングサアン ドゥア 町 (Kelurahan Pegangsaan Dua) の住民の聴取調査結果の一部である。

ジャカルタの輸出入の玄関口をなすタンジュンプリオク港から南に直線で10km足らずのところに位置するクラバガディン郡の一带は、湿地帯も多くて水田稲作農業が営まれてきたところである。水稻は、雨季に在来の長稈種の Tere Jawa、Solo、Cebayar、Sentra などと呼ばれた稲が年に1回作付けされ、あとは水利に恵まれなかったためにパラウィジャ (Palawija) と呼ばれる乾季の作物として大豆や落花生が栽培された。1973年から、いわゆる緑の革命による高収量の新品種の IR や C4 の導入が始まった。東クラバガディン町全体で約 5,000ha の水田があった。それが後述するように工業団地や住宅地および商業用地に転換され、1980年代初めに農地は皆無となったのである。

しかし、その1970年代からこの地域一帯の開発が始まり、プガングサアン ドゥア 町の南側に国道の独立開拓 (Perintis Kemerdekaan) 道路を狭んでカワサン工業団地が開発され、それと前後して東クラバガディン町の南側に、同国道を狭んでジャカルタ首都特別州と州外を結ぶプロガドン・バスターミナルが造られた。政府が、ジャカルタ首都特別州中心部に緑を残しつつ、郊外のこの地域で最初の大規模な工業団地開発を進めたのは、この地域がジャカルタ中心部とタンジュンプリオク港の間に位置して両者にそれぞれ10km足らずの距離にあり、物流にも利便であったからである。その後、80年代になると工業団地はさらに拡大され、この地区の農地はすべて壊滅することになり、さらに90年代に入ると中国系インドネシア人のディベロッパーが経営するサマレコンアグン (Summarecon Agung) 社によって図3に示されている大型商業施設のクラバガディン

モールの開発が進められ、2003年までに600店舗が入る130,000m²の商業施設に発展した。

調査地の東クラパガディン町とプガングサアンドゥア町は、これらの工業団地や商業施設にいわば隣接する位置にあり、表1は2000年から2010年までの3町の面積、世帯数、人口、人口密度、町内の大組(RW)および隣組(RT)などの推移を示したものである。これで分かるように、3町のなかで旧プロガドゥン村を中心とした東クラパガディン町が、狭い面積のところに住宅が密集して最も高い人口密度を示している。

3. 東クラパガディン町住民の社会組織と生活

(1) Haji Asmat Mandranの聴取

(2011年12月10日(土)(曇)(於: 自宅)
RT1/RW4)

北ジャカルタ市内の住民組織に関する本調査研究のインドネシア側の研究協力者になっていただいているのは、インドネシア科学院(LIPI)人口研究所調査研究員のナワウィ(Nawawi)氏である。調査対象地のカンボン・プロガドゥンは彼の出身地であり、彼の両親をはじめ親族や知人も多く住んでおり、調査に際してこれらの方々には多大の協力をいただいた。

その調査協力者のナワウィ氏が1991~94年の3年間学んだ出身高校は公立第45高校(SMA)(北ジャカルタ市)で、1学年が15クラスあり、1クラス48人であった。校舎は当時から4階建であった。また、クラパガディンにある出身小学校の校舎は、第3、第4、第5、第6の4つの小学校(SD)が共同で使用する二部制の学校で、午前は第3、第4の二校が、午後は第5、第6の二校が使用していた。

ナワウィ氏の1983年に亡くなった祖父には長男、長女、次女、二男、三女、四女の順に6人の子どもがあり(長女と次女はすでに故人)、父親

のアスマット(Haji Asmat)さんは長男で、1947年12月25日生まれであった。また父親のアスマットさんも、長女、長男ナワウィ氏、二男、三男、四男、五男の順に6人の子どもがいる。(ナワウィ氏の祖母はこの調査時には健在であったが、2013年1月に99歳で亡くなった。祖母は生前4つの住宅を所有していたが、そのうち長男のアスマットさんが自宅のすぐ前にある家を相続した。ここには貸間が2部屋ある。)ナワウィ氏の母方の祖母は、旧プロガドゥン村で最も多くの土地所有者であった故人のマリキ(Haji Maliki)さんの第1妻であった。したがって、ナワウィ氏の父親のアスマットさんは、自分のきょうだいと両親の親族関係とともに自分の妻のきょうだいと両親の親族関係もカンボン内に厚い親族ネットワークを築いている。しかし、煩瑣になるのでここでは触れない。

旧プロガドゥン村は70~80世帯の村で、うち農地を所有している農家は20世帯ぐらいであった。そのほかの世帯は土地無し農民やインフォーマルセクターの就業者だった。1970年代ぐらいから農地の売買が盛んになり、農地の買手は住宅開発などのディベロッパーが中心であった。ナワウィ氏の祖父は、この村では当時平均より大きい方の農家に属し、農地を約2.5ha、屋敷地を約3,000m²所有していた。祖父が1980年代に農地を購入したときの地価は1m²当たりRp 50,000で、現在の地価は1m²当たりRp 5,000,000と、当時の約100倍になっている。ナワウィ氏の父の自宅の土地は約200m²である。自宅の裏側に12部屋の貸し部屋を持っている。一人で住んでいる高齢のナワウィ氏の祖母は4つ住宅を持ち、そこに合計14の貸し部屋を持っている。貸し部屋代は、1部屋2m×2.5m=5m²の広さで月Rp300,000である。電気代と水道代は間借り人が自分で負担する。部屋には調理場がないので、料理は自分の部屋の前の通路で行う。洗濯とマンディ(水浴)は共同の水浴場で行い、水道代は使用量を平均してそれぞれ

れの部屋代に加算して徴収する。トイレも共同トイレを使用する。

ナワウィ氏の両親が、2011年に20日間の日程でメッカの巡礼に行ってきた。費用は1人当たりRp35,000,000で、2007年から2010年まで貯金して準備した。毎年インドネシアから約25万人が巡礼に行くが、その巡礼者の受け入れ・管理・調整は宗教省が行っている。

ブタウィ人 (Betawi) は、オランダ時代のバタヴィアの頃からジャカルタに元々住んでいた。RW4内にあるメスジッド (Mesjid) の掲示板に葬儀組織の掲示物が張られていたが、ブタウィ語も使われていた。

(2) Zayadi の聴取

(2012年8月21日 (火) (薄曇) (於: 自宅
10:10~11:30) RT1/RW4)

ザヤディ (Zayadi) さんは小学校の宗教の教員である。彼は上記 (1) のアスマットさんの弟で、アスマットさんと彼の親族は、現在の地に住んで4代目になる。1975年頃からクラパガディンの周辺の田に住宅ができるようになり、1980年代前半には周りの全てが住宅地になった。田の購入者の多くは中国系インドネシア人で、1m²当たりRp1,000と安く買った。彼らは、田を宅地に開発し、そこに家々を建築して、1m²当たりRp500,000で販売した。以前は、このあたりのカンポンは互いに離れていて、間に水田が開けていた。1980年代には、クラパガディンの地区はビジネスマンによって支配されるようになった。土地を売って金を手にした農民の中には、再度近隣の地区に土地を買って移った人も、北ジャカルタの東側に接する西ジャワ州のブカシ (Bukasi) に農地を買って転出して農業を続ける人もいた。ブカシにはまだ農地が多く、地価もこの地区より安かったからである。土地が売れた時、多くの世帯が他の地区に転出していった。小学校時代の友達の約1/2が、まだ旧プロガドゥン村があったこの

カンポンに住んでいる。元からここで世代を重ねてきたブタウィ人の場合は、多くが西ジャワ州のブカシに転出していった。

ザヤディさんは6人きょうだい (①長男アスマット、②長女、③次女、④本人、⑤三女、⑥四女) で、その4番目で次男だった。きょうだいの中で自分だけが大学 (IKIP: 教員養成大学) まで進学した。高校まではすべてイスラムの学校、すなわち小学校 (Madrasah Ibtidaiyah)、中学校 (Madrasah Tanawiyah)、高等学校 (Madrasah Aliyah) それぞれのマドラッサ (Madrasah) に行った。当時の小学校の同級生は26人であったが、そのうち中学校に進学したのは24人、高校に進学したのは18人、そして大学に進学したのは5人であった。自分が小学校に入った頃はマドラッサに入学する児童が多かった。現在、クラパガディンでは小学校に就学する児童のうち、普通の小学校 (SD: Sekolah Dasar) に入学する児童が5に対して、イスラムのマドラッサに入学する児童は2の割合である。自分が小学校に行っている頃はカンポン・プロガドゥンには60~70世帯が住んでいた。現在住んでいる人は、約半分が元々ここで生まれ育った人である。以前は、中国系インドネシア人や市外から転入してきた人は少なかった。

地名のプロガドゥンはジャワ語に由来し、もともとの意味は「大きなキャッサバイモが育つ島」のことである。

ザヤディさんは自宅に6部屋の貸し部屋を持っている。3m×3m=9m²の大きさの部屋の貸し間代の月額は、水・電気代込みでRp350,000である。夫婦、夫婦と子ども、または1人で住む場合も、部屋代は同額である。ザヤディさんの家では貸し部屋を始めて7年になる。部屋を借りに来る人は、部屋の情報を基本的に友人から得ている人が多い。普通は隣や近隣の借部屋住民の友人、知人から得ている。また、ザヤディさんは自宅の通りに面した1部屋にコンピュータゲーム機を6台置いて、有料で使わせている。コンピュータゲームで

遊ぶ子どもが多い。利用料金は、1時間Rp2,500である。

貸部屋の1部屋の住人は大人が2人までで、現在部屋を借りている人は次のようである。

- ①借間7年目の40代の夫婦で、中部ジャワのスマラン (Semarang) の出身である。夫は中国系インドネシア人の自宅運転手をし、妻は家政婦をしている。
- ②借間6年目の40代の夫婦で、東ジャワのスラバヤの出身である。夫は中国系インドネシア人の事業者の運転手をし、妻は家政婦をしている。
- ③借間5年目の40代の男性で、西ジャワ州のチアミス (Ciamis) の出身である。串焼き肉のサテー売りをしている。
- ④借間4年目の36歳の男性で、西ジャワ州出身である。駐車場整理員をしている。
- ⑤借間4年目の夫婦で、ジョクジャカルタ出身である。夫は47歳の運転手で、妻は洋裁の仕事をしている。
- ⑥借間4年目の夫婦で、西ジャワ州出身である。夫は40歳で商店の従業員をし、妻は家政婦をしている。

オーナーのザヤディさんが借り部屋人に求める条件は最低次の4点である。

- ①イスラム教徒であること。なぜなら、この住民はすべてイスラム教徒であるから、他の宗教の信者であるとイスラム教徒以外のグループになり、問題や困難が起こる可能性があるからである。部屋を貸す時に契約書を作成することはしないし、記述された規約や誓約書もない。
- ②住民登録証KTP (Kartu Tanda Penduduk) を所持し、住民登録手続きに従っていること。借り部屋をすると、本人と大家と一緒に隣組長に届ける。したがって、組長は住民になった人をみんな知っている。
- ③カンボンの住民のために、夜騒いだり、飲酒

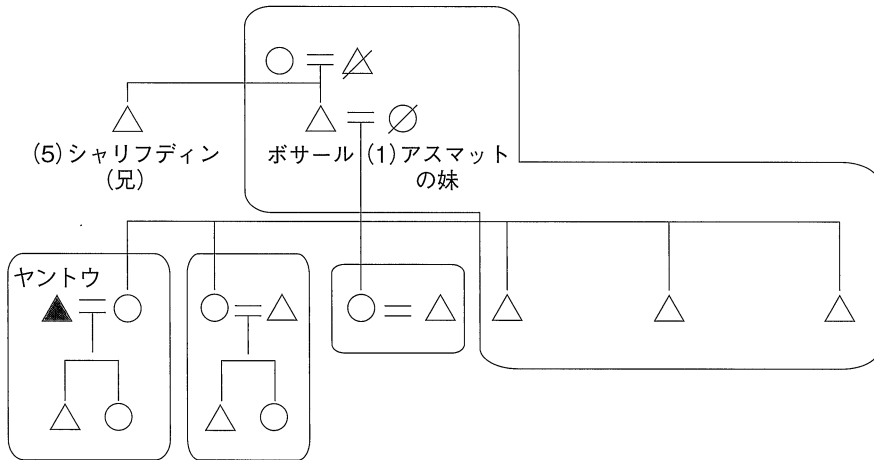
したりしないこと。

- ④どこで働いているか確認できること。

カンボンの社会生活の中で大切な行事の一つが相互扶助のゴトンロヨン (gotong royong)、奉仕活動 (kerja bakti) で、これは2週間に1回行われる。その活動の主な内容は次のようなものである。

- ①道路わきの側溝・水路の掃除は日曜日に行われる。借り部屋の住民も出る。出席できない人は費用弁償としてRp25,000支払い、この金はゴトンロヨンの時の飲み物やスナックの購入に使われる。続けて3回以上欠席することはできない。
- ②夜間の防犯警備のプログラムを実施するシスカムリン (Siskamling) は、普通は選挙が行われるときに実施される。普段の防犯警備は、カンボンで5人の警備員を雇って行っている。隣組 (RT) の会費が、借り部屋の世帯も含めて各世帯から月額Rp7,000徴収されており、警備員の雇用費はこの費用を使う。
- ③葬儀は、死者が出ると、その世帯から各組にいるまたはイスラム寺院のメスジッド (mesjid) に詰めている葬儀世話人 (KMDK : Kerukunan Dalam Mushibah Kematian 死による不幸な状態のなかでの調和の意) に死亡者がでたことを連絡する。その連絡を受けて、葬儀世話人はメスジッドのスピーカーでカンボン内にそのことを知らせる。第4大組 (RW) は6つの隣組 (RT) に分けられていて、葬儀世話人は6つのRTにそれぞれ1人ずつ選出されており、この6人が集まりを持って、死者の家族とともに葬儀の段取りや費用の相談をする。かれらは必ずブタウィ人が就任することになっている。葬儀の費用の積立金は、RT会費とは別に借り部屋人世帯も含めて各世帯から毎月Rp5,000徴収しており、これで賄う。葬儀の際に行われる、死体の沐浴、死体を白い布で包む納棺、死体の埋葬などの作業は、現在はすべて外部の人に頼み、その費

図4 ボサールの家族



用は積立金から払う。以前は、葬儀に参列する人々が死者のために香典を持ってきたが、これも今は行われていない。

このカンポンは大組の第4RWに重なり、6つのRTで構成されている。RTの役員の選出は、通常3人の候補者の間で行われる。選出はRTの寄り合いで紙に候補者の番号を書いて投票し、組長は一番指示が多かった人が、書記は二番に指示が多かった人が、そして会計は三番に指示が多かった人が、それぞれ選ばれる。役員の1任期は3年で、連続3回9年まで再選、就任できる。役員に選ばれる人の最低条件は、①読み書きができ、②信仰の祈りをする人で、③周りから候補者に推薦される人である。組長の手当は月当たりRp300,000である。第4RWの大組長（Ketua RW）は6人の組長によって選出され、大組長は組長から選ぶこともできる。大組長の任期も1任期3年で、連続3回9年まで再選、就任できる。

各組に1人ずついる葬儀世話人およびその他の役員は、大組の役員と組長が直接選ぶ。第1RTと2RTの境のこのカンポンのほぼ中央に建っているメスジッドに掲示されていた資料によると、2009～2011年の第4RWの葬儀世話人の組織と役員は次のように編成されていた。

顧問（Penasehat） （3人）	H. Asmad, H. Alwi, H. Hasbi
会長	H. Komarudin
副会長	Arwan
書記	Kusnadi
会計	H. Nurali
広報係（5人）	Umar（係長）、Kunardi、 Armin、Choirudin、Ansor
準備・設備係（3人）	Azis Muslim（係長）、 Mustopa、Adi
徴収係（6人）	M. Rais、Hasbiallyh、Astari、 Aam、Makiyah、Syaroni
総務係（2人）	Tatang、Munadi

(3) Yantoの聴取

（2012年8月21日（火）（薄曇）（於：自宅
12：10～13：10）RT1/RW4）

ヤントー（Yanto）さんは35歳で、ジョクジャカルタ出身である。中学校まではジョクジャカルタで学び、中学校を卒業するとすぐに、ジャカルタで働いていた兄を頼って1993年にクラバガディンに出てきた。そのあと1994～96年の3年間働きながら夜間高校（SMA Malam）に通い、そこを卒業した。仕事の経歴は、最初にジャカルタに出てきたとき、クラバガディンでガードマンの仕事をしていた兄から仕事の情報を得て、①鶏の飼育の仕事を3年間した。②その次に国営電気公

社 (PLN) の下請け関係の民間会社でガードマンの仕事をした。③次に現在のセメント会社 Tiga Road の下請け会社に移り、駐車場係とガードマンをしている。

妻の父親、義父のボサル (Bosar) さんは現在 59 歳で、西ジャワ州のタクシマラヤ (Tasikmalaya) の出身である。ボサルさんは、両親が小学校を卒業した 12 歳の 1966 年に離婚したため、母親と一緒にジャカルタに出てきた。母親は、ジャカルタのクレンデル (Klender) に住んで店で働いたが、ボサルさんも働いた。その母親は現在 80 歳で、ボサルさんと一緒に住んでいる。母親と離婚した父親は運転手だった。

ボサルさんは、1973 年にクラパガディンに転居し、1977 年にプタウィ人で (1) のアスマットさんの 2 番目の妹である義母と結婚して、義母の相続した土地に住んだ。それが今住んでいるところである。義母は 6 人きょうだいで、田は親が売ったために田の相続はなかったが、親の屋敷を 6 人で分けて相続した。まだ田があった当時は、どこの家族でも田の仕事は皆で一緒に働いて作った。

ボサルさんは、7 年前に妻と死別したが、図 4 に示すようにその妻との間に 6 人の子どもがいる。長女はヤントウさんと 2000 年に結婚して独立し、次女は結婚して親のところに借り部屋をして住み、3 女は結婚してランボンに住んでいる。4 番目からの 3 人の子どもは男で、全員未婚者である。長男はインドネシア大学で IT 関係の勉強をし、卒業後日系企業のヤマタケに就職している。2 男は短大、3 男は高校にそれぞれ在学中である。現在、ボサルさんは、80 歳の母、次女の家族 4 人、長男、2 男、3 男の 9 人で住んでおり、1 月の生活費は合計 Rp5,000,000 である。

プロガドゥンのカンポンは、ニューカマーが非常に多い。彼らの多くは借り部屋に住んでいるが、貸部屋や貸家に税金が課されることはない。

現在、ボサルさんの家には 8 部屋あり、この

うち 2 部屋を自宅用に使い、2 階の 3 部屋と 1 階の 3 部屋を貸し部屋にしている。1 部屋 $3\text{m} \times 3\text{m} = 9\text{m}^2$ の部屋代は、電気代と水道代を含めて月額 Rp300,000 である。空き部屋ができて、入居希望者が多く、2 週間のうちにはうまる。借り部屋をする人たちの選択の基本条件は、①安全、②清潔、③自転車、オートバイを部屋の周りに入れることができる、④隣近所の社会関係がよい、の 4 つである。

(4) Kusnadi の聴取

(2012 年 8 月 21 日 (火) (薄曇) (於: 自宅 15:00~15:50) RT6/RW4)

東クラパガディンの住宅所有者の約 60% が、貸家や貸し間を持っている。

クスナディ (Kusnadi) さんは 43 歳で、RT6 の組長をしている。大学 (S1) 卒で、大学では行政学を学んだ。大学卒業以来 19 年間学校の実習室の教材準備を担当する職員の仕事に従事している。両親ともジャカルタのカユプティ (Kayu Putih) 出身のプタウィ人である。父は 1985 年に亡くなった。きょうだいは 4 人 (順に長男、2 男、長女、2 女) で、全て結婚しており、自分は 2 番目で 2 男である。長男は母が亡くなった後に妻の側に住居移った。2 男と 2 女のきょうだいは親から相続したこの地区の土地に住み、長女は夫の側に住んでいる。プタウィ人は、両親がまだ存命の間は子どもは必ず親と一緒に住むことになっている。親がいなくなって初めて子どもはどこにでも住居を移ることができる。

クスナディさんは、3 年前プカシにディベロップの不動産会社が販売した 60m^2 の家を自分で購入して貸家になっている。その貸家の家賃は、1 年 Rp2,000,000 である。月額で払ってもらう場合には 1 カ月当たり Rp175,000 (年間合計 Rp2,100,000) 払ってもらう。普通、クラパガディンでは $3\text{m} \times 3\text{m} = 9\text{m}^2$ の部屋代が、電気代と水道代を含めて月額 Rp350,000 である。

クスナディさんは2005年に第6RTの組長に選ばれ、現在連続3期目で2014年に任期満了になる。第4RWにいる6人の組長のうち、第6RTの他に第4RTの組長も現在3期目である。

組長の主な職務は、以下のようなことである。

- (1) 誰が住んでいるか、住民の把握
- (2) 行政的なサービスの職務

①住民登録書KTPを作成するのに必要な書類を作成してRWに提出する。これが日頃もっとも多い仕事で、5年毎に書類を作成する。RTから提出した書類は、RWを経由して町（Kelurahan）に提出される。

②出生者の証書資料の作成

③婚姻者の証書資料の作成

ムスリムの人の場合は、RT→RW→Kelurahanを経由して宗教役所（KUA：Kantor Urusan Agama）に届けられ、概当者が少ないムスリム以外の人の場合は直接宗教役所に届けられる。

④警察登録資料の作成

仕事を探し、就職する際に犯罪歴の有無等に関する警察証明書（Surat Keterangan Polisi）が必要なため。

⑤転出証明書の資料の作成

住民が他の所に転出していく場合に作成する。

⑥死亡証明書の作成

以前は組長だけで作成したものであったが、現在は医者 の証明を必要とする。

⑦RWから社会活動について指示があった際には、組の中の調整をして、その都度実施する。

(3) 死による不幸な状態のなかでの調和（KDMK：Kerukunan Dalam Musibah Kematian）に努める。死亡者が出たことによる組内の悲しみや動揺を抑えて、住民の調和を図るようにする。

(4) その他に、困った問題に対処する。たと

えば、①たびたび社会問題の発生が報告され、犯罪は月に10回ぐらい発生するが、その防犯に努める。また、②未婚者が同棲して部屋に住むようなことが起こらないように、不道德な行動の取り締まりをする。

RTの役員は、組長、書記、会計、スポーツ担当係、芸術文化担当係の5人である。第6RTの毎月の会費徴収総額はRp600,000、したがって3月で計Rp1,800,000になるが、このうち3月に1回Rp300,000を第4RWに納めるので、3月で計Rp1,500,000が組の使用できる額となる。第6RTでは金持ちもいるので、組の会費は所得水準によって差額が設けてあり、月額会費の最高はRp15,000、最低Rp8,000はとなっている。

この町（Kelurahan）のあたりでは、1つの隣組（RT）はだいたい30～50世帯で構成されており、1つの大組（RW）は平均5つの組で構成されている。

(5) Pak Syarifudin (Pak Udin) の聴取

(2012年12月20日（木火）（曇）（於：自宅 10：10～11：30）RT2/RW4)

シャリフディン（Syarifudin）さん、通称ウディン（Udin）さんは1946年3月21日生まれの66歳で、西ジャワ州のタシクマラヤ（Tasikmalaya）出身である。妻は51歳で、同じ西ジャワ州のタクシマラヤの出身で、婦人会の役員をしていて活動的な女性である。

1951年にジャカルタのマトラマン（Matraman）に転入した。そこで小学校（SR：Sekolah Rakyat）から18歳でクバヨラン・バル（Kubayoran Baru）にあった航空のSTM（Sekolah Teknik Menengah技術高校）を卒業するまでいた。学歴は、①小学校6年、②中学校3年、③クバヨラン・バルにある航空技術高校3年を18歳で卒業。学費は無料で、毎日牛乳が与えられた。小学校に入る規準は、年齢ではなく頭越しに反対側の耳に触れることができるかどうかであった。

そのあと就いた仕事の職歴は次のようであった。

- ①自動車とオートバイの修理場を Rawa Teratai で開いた (1966-69)。
- ②1969年から紙工場の Kartin 株式会社の工員として働いた (1969-72)。
- ③1972年にインドネシア第一開発株式会社 (PT PTI) の工場見張り人にかわった。インドネシア第一開発株式会社とその他の会社との間で行われた仕事には、南Merdeka通りの石油天然ガス工場の建設、200室規模のホテル Kemang の建設、洗濯工場の建設等があった。バリへの転任を要請されたが、配置換えは望まなかった。優秀能力証明書を使って志願することをしなかったのは、第一Cakung 株式会社への外部転出ができなかったからである。職場ではいつもインドネシア労働組合 (SPSI) の長をしていた。

この間の1972年に、クラバガディンに借家をして転入した。母親と一緒にMatraman住んでいた弟のボサルさんがクラバガディンに移ってきたので、一緒に移った。また、それは勤務先に近かったからでもある。最初は1月Rp30,000の契約で、8年間借りた。最初の仕事をしていた時にCakung近くのRawa Terataiに家を買ったが、クラバガディンに借家をして移ってきた。

1973年に隣組 (RT) RTの手伝いをするようになった。東クラバガディンの第4RWは世帯数が一番少なかった。そして1976年に第1組の組長に選ばれ、さらに2006年に第4RWの書記に、続いて第4RW長に選ばれ、2012年まで務めた。

RT等の役員になったのは、社会的なことに関心があったからである。たとえば、最初に来て最後に帰る忠実な仕事のやり方や、病人を送ること等である。国の支援事業である社会振興国家プログラム (PNPM: Program Nasional Pemberdayaan Masyarakat) の支援を受けて、住宅街の通路の改修を行った。これで、昨年と今年は住民の下からの要請によってプログラムが実現された。

すでに定年になって8年であるが、結婚したのは1974年である。妻の名前はRini Eka Astiti、通称トゥティ (Tutik) で、西ジャワ州のタクシマラヤの出身である。子どもは2男2女で、長男、長女、二男、次女の順である。

この人々の社会関係は、社会的なことに関心があり、基本的に自分達が住んでいるところが好きで、共同生活することがしやすいことである。第1RTで家を貸している人は6人で、借りているのは地元の人である。

地元の人とニューカマーの人との関係について述べると、以下のようなことを指摘できる。

ニューカマーは、6カ月間は転入届 (KIPEN) で、そのあとで確定の住民登録 (Kartu Tanda Penduduk) をする。ニューカマーは保証人が必要で、条件として3か月後まで仕事を持っていることである。登録には転入先での社会化の過程が必要で、3人以上の友人がいなければならない。行政的なシステムでは、転入者がRTに届けを出し、それによって町が転入届 (KIPEN) を作る。通知を受け取るまでに3日かかる。地元の人とニューカマーの関係は良くなっている。仕事の需要は、クラバガディンでは平均して出稼ぎ人の仕事が多くある。

イスラムの学習組織があるが、カンボンの社会を担保しているのは古老たちである。スポーツ組織もあり、サッカーが行われている。郡からの支援金がある。近隣の夜間の防犯警備を行うシスカムリン (siskamling) には4人の警備員を雇って費用を払っている。防犯警備の時間は夜の10時から翌朝の5時まで、5つのカンボンの周りを警備している。防犯警備員への費用支払いはゴトンロヨンで行っている。募金は1世帯当たり1カ月Rp5,000であるが、この費用はKDMKの組織によって運営される。KDMKは、死の悲しみや混乱を軽減するための特別な組織で、葬儀の最も重要な人を援助し、もし転出した人があれば訪ねて金を受け取る。埋葬、椅子、布等の費用に、一時

的にRp2,000,000支援されるが、重要なことは金額ではない。悔やみのための活動によって金を集める。活動には、死者を7晩にわたって祈る活動がある。KDMKはRWの範囲で組織されているが、これに従うのは住民にとって義務である。

RW内の組織のうちKDMKは住民の自主的な独自の互助組織であるが、その他政府の意向で組織されているものに、計画出産による人口抑制や家族福祉向上などのプログラムを実施する婦人組織のペーカーカー PKK (Pembinaan Kesejahteraan Keluarga)、若者の健全育成と社会貢献を推進するための青年組織のカランタルナ (Karang Taruna)、少産少死のため育児改善と母子保健改善のためのプログラムを実施するポスヤンドゥー (Posyandu: Pos Pelayanan Terpadu)、それと上記した近隣地区内の夜間防犯警備のプログラムを実施する組織のシスカムリン Siskamling (Sistim Keamanan Lingkungan) などがある。

4. プガングサアンドゥア町住民の社会組織と生活

(1) Kastolan Siswantoの聴取

(2012年8月22日(水)(薄曇)(於:自宅
10:30~11:30) RT1/RW13)

第13RWのカンボン名はワルンジェンコル (Warung Jengkol) と呼ばれ、クラバガディン郡の中で最も古いプタウィ人のカンボンである。ここは、ジャカルタ、そしてインドネシアで最も古くて大きいバスターミナルのプロガドゥンに近く、またジャカルタでかつて最大の工業団地であったプロガドゥンのカワサン工業団地 (Kawasan Industri Pulo Gading) にも近い。本研究の研究協力者のナワウィ氏は、このカンボンのワルンジェンコルにある小学校を卒業した。

カストラシスワント (Kastolan Siswanto) さんは1959年生まれで、現在第13RW長をしている。RW長には2年前の2010年に就任し、1987～

2007年の間は第1RT長だった。以前、弁当屋をしていたが、現在は土地ブローカーの仕事をしており、進出企業等へ土地の仲介をしている。

第13RWは、451世帯1,442人、うち大人(17歳以上)が約900人である。

RWの役員は、RW長、副RW長、書記、会計と、その他に開発、安全・防犯、スポーツ・青年、婦人会 PKK、ポスヤンドゥー (Posyandu) 等10の各部の長で構成される。役員の選出は、RW住民の選挙で選ばれる。役員の1任期は3年で、再任の制限はない。5年前から町から運営費が交付されている。各部の長は、RW長から就任依頼の要請があり、選ばれる。各部はそれぞれ個別に係員を持っている。各部で活動をするときには、各部の長が委員会を組織する。一番忙しい係りは婦人会とポスヤンドゥーである。毎月、地域保健センター Puskesmas (Pusat Kesehatan Masyarakat) のドクターによって、乳幼児の計量と検診、妊娠中の女性の診察、病気の診察、家族計画 (KB: Keluarga Berencana) のサービスなどが行われる。このワルンジェンコルのカンボンにはポスヤンドゥーが2つある。

町協議会 (LMK: Lembaga Musyawarah Kelurahan) は、町にRWが25あり、各RWより1名協議会議員が選出されるので合計25人の代表が議員となっている。

地域保健センターは町に1カ所ずつ設置されており、プガングサアンドゥア町では第1RWにある。婦人会のボランティア活動をするカデール (Kader) はポスヤンドゥーの活動も手伝う。

町には要請しているが、第13RWはまだ死者も運ぶ救急車を所有していない。裕福なRWは自前で救急車を購入している。RW13では、必要な時に24時間いつでも自動車をもっている住民に賃借し、タクシーオートバイのオジェ (Ojek) も賃借する。

RWの平均歳入は、1年間Rp4,000,000、1カ月Rp300,000である。その収入源は、ホテルの駐車

場収入である。住民からの寄付はない。各RTは、RWに安全・防犯のために使われる費用を毎月Rp400,000支払う。

RWの歳入の内訳は次のようである。

- ①ホテル駐車場料金 毎月Rp300,000
- ②RTからの納付金 毎月各RT当たりRp400,000
- ③町からの活動基金が毎月Rp800,000あり、これはRWの10人のスタッフの報酬に使われるために3ヵ月ごとに支払われる。

RWの仕事は、かつては住民登録などの仕事を中心だったが、現在は土地、オフィス、ビルのブローカーの仕事である。現在の地価は、1m²当たり海岸に近いところでRp2,000,000、プガングサアンドゥア町の辺りではRp5,000,000する。

RW長の集まりは、その時のプログラムや問題によって回数が異なる。集まりは、町役場と郡役所で開かれる。

ワルンジェンコルは1975年以前には100世帯ほどで、他のカンボンとの間の距離が1kmぐらいあった。1975年に工場ができるようになり、その後開発で土地を手放す人が増えていった。農地を売った人の中には、都市の生活を好まないため、西ジャワ州ブカシの方に土地を購入して、そちらで農業をやる人もいた。そちらの近年の地価は1m²当たりRp3,000,000である。

RWの中での集まりは、3ヵ月に1回ぐらいで、RTの場合も同様である。プログラムによって集まりが必要になれば、この回数も変わる。第13RWの事務所は、道路拡張のためなくなった。

(2) Pak Asmatの聴取

(第13RWの第4RT長 2012年8月22日(水)
(薄曇)(於: 自宅14:00~15:00))

2001年から現在までRT長に就任し、1任期が3年で、現在は4期目になっている。

RT長は、17歳以上の住民と結婚した17歳以下の住民全員の投票で選出される。投票方法は、投票用紙に刷られた候補者の写真に穴をあける方法

である。RT長の選挙は、まず7人の選挙委員会が作られ、候補者の選定を行う。候補者数の上限は5人で、だいたい5~3人ぐらいを候補者として選定する。候補者選定の条件は、①イスラム教徒であること、②健康であること、③住民登録証(KTP: Kartu Tanda Penduduk)を所持していること、④女性でも可能であること、⑤高等学校卒業以上であること、などである。候補者の名前をRW長に伝え、RW長は町役場(警察、軍militer)に伝える。1週間前に候補者名を掲示する。投票当日は、RW長が立ち会い、投票時間は8:00~13:00で、投票終了後選挙委員が開票し、結果をRW長に伝える。1任期は3年とされているが、再選の制限はない。

RTのその他の役員は、RT長が就任を依頼して決める。1任期3年で、再選の制限はない。RT長以外の役員は、書記、会計の3役、スポーツ係、芸術係、相互扶助活動係、清掃係、防犯係である。

RTの機能は、①世帯主の集まりによる話しあい、②家族問題などの社会的問題への対応、③奉仕的な活動(道路やRT内の清掃、特にラマダンの時のゴトンロヨンは町からの義務となっている)、④葬儀の互助に関してKDMKはない。第13RWでは、KDMKを行っているのは第2RTと第5RTで、1人Rp500積み立てている。しかし、第1、第3、第4のRTはKDMKを行っていない。

第4RTの住民の30%がプタウィ人で、70%が外来者である。

(3) Pak Sudirhamの聴取

(プガングサアンドゥア町の第13RW 選出町協議会議員 2012年8月22日(水)(薄曇)
(於: 自宅15:10~16:00))

スディルハム(Pak Sudirham)さんはナワウイ氏の姉の夫で、1970年3月10日生まれである。現在住んでいるカンボン・ワルンジェンコルの出身である。2012年より町協議会(LMK)議員に就任しているが、現在の職業は、飲料水アクア配

達車の運転手である。

プガングサアンドゥア町には全部で25のRWがあり、各RWには7人の選挙委員会（Panitia Pemilihan）が置かれ、委員の1人にはRW長が入る。町協議会議員候補者の条件や選挙は、17歳以上の住民によって行われるが、上記の第4RTの場合と同じである。

郡にも郡協議会が置かれていて、各町のRW長の一人が選ばれて、郡協議会の議員になる。

町協議会も郡協議会もともに週2回の割合で開催される。会議の時間は、町協議会は夜の20：00～22：00、郡協議会は午前中の9：00～12：00で、後者には郡長と町長が出席する。協議会議員と向かい合って前の席に議長、郡長、町長たちが座る。協議会議員の役職は、協議会議長、協議会副議長、書記、会計、財政委員長、政策委員長等があり、各委員の手当ては全員同額で、月額Rp900,000で、3ヶ月ごとに支払われる。この中から月額、喜捨にRp50,000、議員会費にRp50,000が差し引かれる。

5. おわりに

本報告で紹介した北ジャカルタ市クラパガディン郡にある東クラパガディン町もプガングサアンドゥア町も、1970年代に入るまではジャカルタ郊外の水田稲作農村地域であった。ところが、1970年代から始まった大規模な工業団地、住宅地、さらに商業地の開発によって農地の改廃が進められ、80年代半ばまでに農地は皆無となった。その後、かつての村がこれらの開発と土地利用によって都市開発地域のなかに囲い込まれるとともに、村を隔てていた水田も開発されて村がつながるようになり、かつての景観は一変することになった。そして、かつて村を形成してきた集落だけが土地利用の再開発から取り残され、そこでは地付きの住民の多くが屋敷地を所有して住み続けていて、旧村以来の近隣関係が持続されていた。

それが、現在都市のなかに残され、農村集落の生活慣行とどめているカンボンと呼ばれる社会空間である。

しかし、かつての農村で農業を生業としてきた農家や、その農家の農業雇用に生活の糧を求めてきた土地無し農民は、学歴はもちろんのこと、技術や知識もないために、その後に進出してきた企業に正規従業員として雇用される機会に恵まれることはなく、もっぱらガードマン、清掃、建築作業、駐車場警備、家政婦、カキリマといわれる物売りなどのインフォーマルセクターの雑業部門に就業せざるを得なかった。農業経営をしてきた農家のなかにはブカシなどの農村部に農地を求めて転出していく農家もあったが、そのような事例は少なかった。

そのなかで、旧村落だったプロガドゥンやワルンジェンコルに屋敷地を所有していた農家は、自宅を改装しあるいは屋敷地に簡易な貸間住宅を建設して、集落周辺の開発によって増大した雇用の機会を求めて外部から転入してくるニューカマーに貸し部屋をし、その収入で生活を支えている。貸間の部屋代は、毎月定額の収入を安定的にもたらし、かつての屋敷地を所有していた農家とその相続者の親族にとっては、仕事こそ不安定なインフォーマルセクターに就業していても、両者の収入の組み合わせによって比較的安定した生活をする事ができている。本報告は、開発に取り込まれていく過程で、かつての農村住民が、彼らの持ち合わせた資源でどのようにそれに適応し、生活を支えてきたかを示している。

かつて筆者は、中国の東部沿海開発地域における都市近郊農村の調査研究で取り上げた上海市の西隣に位置する昆山市張浦鎮の事例で、開発に取り込まれしかも再開発から取り残された農村集落の農家が、自宅を改修してニューカマーに部屋貸しを、それを主要な収入源として生活を成り立たせている実態を報告した³⁾。都市開発のなかで、集落の再開発を行わないまま、かつての農村の生

活慣行を持続させつつ、生活の主要な原資を貸し部屋の収入に依存している構造は、本報告で紹介した事例と全く共通しているといえるだろう。ただ、昆山市の事例が元から地付きの住民がニューカマーに対してきわめて排他的であったのに対して、本報告の2つのカンボンでは地付きの住民がニューカマーに対して受容的であることが対照的である。本報告では両者の比較が研究課題ではないので、この課題については別の機会に譲りたい。

〈付記〉

本研究は、平成25年度科学研究費補助金（基盤研究C）「農村社会の持続的発展と村落自治—ジャワ農村の地方分権化と村落行政組織再編の研究—」の助成を受けて行った研究成果の一部である。

くろやなぎ・はるお / 文化情報学部教授
E-mail : hkuro@sugiyama-u.ac.jp

注

- 1) 拙稿「中国東部沿海開発地域における都市近郊農村の二元的社会構成—昆山市張浦鎮張浦村の事例研究—」（『椋山女学園大学研究論集』第43号（社会科学篇）145～161頁）2012年3月）に、中国の昆山市の貸間の事例について詳述したので参照されたい。
- 2) カンボンは、マレー語やインドネシア語のムラや集落を意味する言葉に由来するが、ジャカルタでは都市の庶民の居住地域で用いられ、そこには田舎の意味も含まれている。
カンボンと呼ばれているところは、かつて一つの村を成していたところで、もともとの住民は親族関係でつながっている人が多かった。本報告で取り上げるカンボン・プロガドゥンとカンボン・ワルンジェンゴルもそれぞれ一つの村を形成していたところで、親族関係でつながっている人も多く住んでいる。
- 3) 拙稿「前掲論文」（『椋山女学園大学研究論集』第43号（社会科学篇）145～161頁 2012年3月）を参照。

参考文献

- 黒柳晴夫「中国東部沿海開発地域における都市近郊農村の二元的社会構成—昆山市張浦鎮張浦村の事例研究—」（『椋山女学園大学研究論集』第43号（社会科学篇）145～161頁）2012
- 齋藤綾美『インドネシアの地域保健活動と「開発の時代」—カンボンの女性に関するフィールドワーク—』御茶の水書房2009
- 宮本謙介他編『アジアの大都市〔2〕ジャカルタ』日本評論社1999
- 吉原直樹編著『アジア・メガシティと地域コミュニティの動態—ジャカルタのRT/RWを中心に—』お茶の水書房2005
- Departmen Pendidikan dan Kebudayaan, *Sistem Kepemimpinan di Dalam Masyarakat Pedesaan di Daerah Khusus Ibukota Jakarta*, 1986（教育文化省『ジャカルタ首都圏の農村社会におけるリーダーシップのシステム』）